

# 御城だまり

Ugushikudayori



## 首里城基金修理事業 被災した美術工芸品の 修理について

被災した美術工芸品の修理・管理体制等の検討を目的に、令和元年度に第三者委員会「首里城美術工芸品等管理委員会」を設置。

計4回の委員会、及び専門分野のワーキングを開催し、調査・修理・復元に関する提言をもとに、美術工芸品等のオリジナルの価値を損なわないよう、修理を行っています。

令和6年度に行われた修理の一部をご紹介します。

# 『水盤』の修理



被災前



修理後

## 資料概要

【名称】水盤  
 【法量(cm)】直径約70.0/高さ約7.0  
 (※龍柱部分を除く)  
 【修理施工者】工房いにしへ

大正期から昭和初期にかけて壺屋で作られた「古典焼」の一つです。古典焼は異国情緒をたたえた商品として、当時、販売不振に陥っていた壺屋焼窯元において造られた一連の陶器群です。浮き彫りや貼付の多彩な文様が特徴で、南国的なヤシの

木や魚文様、「エジプト文」と呼ばれるような平坦な人物表現などがありました。「古典焼」は人気を博し、おみやげ物や民俗資料として海外まで渡っています。壺屋焼窯元は「古典焼」ブームに救われたのでした。しかしその後、「民藝」ブームが隆盛し、昔ながらの壺屋焼の人気が出るようになると、陶工たちも昔ながらの作風に回帰しました。そして「古典焼」は、むしろ「用の美」を謳う民藝運動にそぐわないものとして、次第に忘れられていきました。「古典焼」が再評価されるのは1990年代頃になってからです。

本作品は「古典焼」のなかでも特注品とみられるもので、中城御殿(尚王家)にあったという伝承があります。龍の口から水が流れるように工夫されていて、調度品として作られたものと見られます。

## 損傷状態

当財団で受け入れた当初からヒビを修理した痕跡がありましたが、火災により全体が破損し、龍柱も倒壊しました。とくに大型の「水盤」は火災時の急激な収縮に耐えきれなかったようです。また、表面も全体的に元通りにするのが不可能ほどに変質・変色していました。多彩な色材を使った「古典焼」の表面は堅牢でなかったのです。どのように修理すべきか、検討を重ねられた結果、龍柱は復元が不可能で、水盤本体も元通りに直すためには表面全体を塗り替えるような大修理になることが明らかになりました。そこで、龍柱は「被災資料」の部材としてススを落としてそのまま保管することにしました。本体の「水盤」は、できる限りススを落として破片は接合し、全体の形状は可能な限り元通りに近づけるものの、表面の変色や破損部分はムリに補修しないこととし、「被災資料」として保存・活用をおこなうという方針のもと、修理作業を開始しました。

## 修理工程



破片のパーツを合わせる

### 1 破片の搜索

ガレキを集めた収納袋のなかから、水盤の破片を丹念に探しました。水盤本体の破片は大きな10点の破片と、無数の小さな破片が見つかりました。龍柱部分についてはススを払うのみで、接合などの修理作業を行わないということで、破片の搜索は断念しました。



スス払い

### 2 洗浄

水盤本体破片を、高圧洗浄機などを使って慎重に洗いました。龍柱部分は表面のダメージが大きかったこともあり、ススを払う程度に留め、そのまま保管しました。



接合後

### 3 破片の接合

水盤本体を構成していた大きな破片10点と無数の小さな破片を丁寧に接合しました。最初に小さな破片を大きな破片4点に接合する作業を行い、次に10点の破片を接合する、という工程を取りました。



破片の接合



色合わせ

### 4 カラーフィル技法

接合と接合面の仕上げはカラーフィル技法で行いました。カラーフィル技法とは、近代英国で文化財としての陶磁器類の修理のために開発された技法です。エポキシ系の樹脂を主剤として破片を接合し、色合わせの色材も同じくエポキシ系の樹脂で修理します。色合わせによって陶磁器の亀裂を目立たないように修理ができます。数十年後の再修理の際にも溶剤によって陶磁器本体を破損させることなく接着面をはがすことができるので、長い目で文化財を保存するようになっています。今回は、被災前の状態に修理をすることが目的ではないため、色合わせは最小限に留めました。



カラーフィル充填

# 『黒漆菊花鳥虫七宝繫沈金食籠』の修理



被災前



被災直後

## 資料概要

【名称】黒漆菊花鳥虫七宝繫沈金食籠(3年計画の1年目)  
 【法量(cm)】高さ38.2/径33.3  
 【修理施工者】琉球漆工藝舎

円形、印籠蓋造りの二段重ねの食籠です。甲が一段高くなった深い蓋、肩と尻に丸みをつけた形となっています。黒漆塗りに沈金で七宝繫ぎの地文様に菊を全体に配し、鳥や蝶、蜻蛉、蟻螂などの昆虫が描かれています。一段高くなった甲の縁に界線と縦横線文を、各段の文様の上下に二重界線を巡らせています。蓋、上段、下段ともに内側は朱漆塗です。上段内側は花形の仕切りがあります。

## 損傷状態

資料全体が黒ずみ、塗膜の艶が失われています。火災による影響で塗膜の劣化が著しく進み、表面には細かな断文が入り、動かす度に塗膜片が剥落していました。木地の収縮が進み、構造上の亀裂が各接合部に見られ、その周辺塗膜が剥離、剥落していました。火災被害により滲出してきたと考えられる物質が垂れて固まった箇所が複数見られます。また、その物質により薄葉紙が所々に付着していました。

## 修理工程



仮止め

### 1 薄葉紙剥がし、仮止め

薄葉紙<sup>\*1</sup>を剥がす際、紙に付いてきた塗膜片は、<sup>がんびし</sup>雁皮紙と<sup>でんぷんのり</sup>澱粉糊で元の位置に仮止めています。  
\*1 薄葉紙…作品を保管するために包む紙。



麦漆含侵

### 2 塗膜押え

通常、初めにクリーニングを行いますが、本資料は塗膜の剥落が著しいため、塗膜押えを先に実施しました。今年度は最も損傷の激しい上段の塗膜押えを進めました。細かく劣化した塗膜は、反りが強く、固くなっているため、<sup>にかわ</sup>膠液や<sup>むぎうるし</sup>麦漆による接着を適宜選んで行いました。



塗膜押え

# 『黒漆牡丹七宝繫沈金蓋台』の修理



被災直後



修理後

## 資料概要

【名称】黒漆牡丹七宝繫沈金蓋台  
 【法量(cm)】高さ7.5/口径5.3/羽12.0/底径6.5  
 【修理施工者】目白漆芸文化財研究所

木製漆塗りの蓋台です。総体を黒漆塗りに、<sup>ほおずき</sup>酸漿の内側のみ朱漆で塗られています。酸漿、鏝、高台共に上下に界線を設け、その間に沈金で七宝繫ぎの地文に牡丹文が表されています。

## 損傷状態

総体に経年による汚れの付着がありました。<sup>つばふち</sup>鏝縁や<sup>ほおずき</sup>酸漿、高台との接合部周辺、高台の内側や畳付には網目状の細かな亀裂が生じ多数の塗膜が剥離していました。高台は、畳付の一部で塗膜および下地が欠損し、布着せ層が露出していました。また過去の修理箇所には茶褐色の塗料が塗布されていました。

## 修理工程

### 1 養生・クリーニング

塗膜の亀裂部分や損傷箇所に、小さく短冊状に切った雁皮紙を糊で貼り、剥落防止の養生を行いました。クリーニングは、作品表面の埃を毛棒で払い落した後、精製水を僅かに含ませた柔らかい木綿布や綿棒などを使用し、数回に分けて漆塗膜の表面の汚れを少しずつ取り除きました。

### 4 保存処置

畳付部分の損傷箇所は、漆塗膜が欠損して布着せの繊維や織目、下地の粒子、漆塗膜の断面などが露出しており、琉球漆器の構造を調査することができる資料として貴重な状態でした。濃度を調整した膠を<sup>かまきり</sup>含侵させて構造および下地・塗膜などの安定化処置を行いました。

### 2 膠含侵

火災の影響で柔軟性が<sup>ぜいじやく</sup>失われ脆弱な状態であり、そのままでは漆による<sup>おさ</sup>押さえが困難であったため、膠を<sup>かまきり</sup>含侵し仮押えをして安定させました。

### 5 下地付け

小さな亀裂、損傷箇所には、漆下地を施す下地付けを行いました。

### 3 塗膜押え

剥離の状態に応じ、麦漆の希釈濃度を溶剤で適宜調整し、筆などを用いて漆塗膜の際から数回に分けて含侵しました。その後、麦漆が表面に残らないよう丁寧に拭き取り、<sup>しんぱ</sup>心張り法を用いて剥離箇所を押さえ圧着しました。

### 6 さび 錆付け

下地付けをした箇所や欠失している箇所は、僅かながら塗膜の厚み分下地と段差が生じており、触手などにより塗膜が剥落する恐れがあります。塗膜際<sup>さび</sup>の処置として錆付けを行いました。

### 7 漆固め

経年および火災の影響を受けて劣化した漆塗膜は、塗膜表面の補強を目的として、漆固めを行いました。

# 首里城基金

未来へ残そう沖縄の心

貴重な美術工芸品等の  
収集・復元・保存・人材育成に向けて



首里城は沖縄の歴史文化を象徴する貴重な文化遺産でしたが、沖縄戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰したり、国内外に散逸してしまいました。

約450年にわたる琉球王国の王府としての首里城復元は、県民の長年の悲願でありました。

首里城の建物については、国、県及び関係者のご尽力により本土復帰記念20年事業として1992年11月に47年ぶりに復元され、首里城公園として一部開園し、2019年2月には全面開園されました。

一方、展示物については、国内外に散逸した首里城関係の文化遺産を収集し、復元し、首里城等で一般公開していくため、県、市町村、各種団体、また多くの方からの協力を得て、首里城基金が財団に設置され、これまで文化遺産収集事業を続けてまいりました。

しかし、2019年10月31日、首里城は火災で焼失し、貴重な美術工芸品も391点が焼失しました。

首里城の再建に向けた動きが加速するなか、偉大な先人たちが残してくれた貴重な美術工芸品等の遺産を収集・復元・保存し、首里城で展示できるよう、首里城基金の造成に皆様方の絶大なるご支援、ご協力賜りますよう、心からお願い申し上げます。

## 首里城基金の仕組み

首里城基金は、首里城での文化遺産収集事業に役立てられています。



首里城  
公園HP



ON  
THE  
TRIP

